

坂本、瀬谷支隊の台児庄撤退の経緯（三） —— 1938年4月

姜 克 實

第八節 両支隊の台児庄撤退の実態

撤退の過程において、日本軍がいかに行動し、どれほどの損失を出していたか。これは「敗北」論と「反転」論者双方の関心事で、立論の証拠にもなるが、しかしこれまで、中国側の一方的「大捷」の宣伝、武勇談以外、日本ではこれについての研究はなかった。次に、戦闘詳報などの史料を中心に、台児庄戦場より瀬谷支隊(4月6日夜)の撤退、台児庄東戦場より坂本支隊(4月7日夜)の撤退の実態をそれぞれ再現してみよう。

一 歩兵第十聯隊の転進と高皇廟附近の戦闘

瀬谷支隊長から撤退命令である「瀬支作命第七十八号」が下達されたのは4月6日1530であり、1630支隊司令部楊家廟に出頭した中西熊太副官(少佐)は命令受領して南洛にある聯隊本部に帰還した。命令書の要旨は次の通りである(歩兵第十聯隊関係部分のみ)。

(前略)

- 二、支隊ハ本日没後全力ヲ以テ北方ニ転進シ坂本支隊ノ左側背ヲ脅威スル敵ヲ撃滅セントス
- 三、歩兵第十聯隊第一大隊ハ日没ト共ニ南洛附近出発随所ニ敵ヲ撃破シ白山西東西高地ヲ占領シ支隊ノ左側ヲ掩護スヘシ
- 四、歩三九第一大隊長ノ指揮スル部隊ハ獐山高地ノ敵ヲ駆逐シ同地東北方郭庄ヲ占領シ支隊ノ右側ヲ掩護スヘシ¹。

支隊主力の後退路の確保、とくに後退の目的地たる泥溝西の高地を確保し、支隊全体の撤退を掩護する任務が与えられた。第三節に触れた、この日の朝0700の「瀬支作命第七十七号」——南洛に兵力を集結して西側敵への攻撃準備及び獐山高地の占領——と併せて吟味すると、瀬谷の撤退の部署はすでに朝から秘密裏に行われた事がわかる。また注目すべきは、これは実質上の撤退命令であるが、表現には「一撃作戦」の目標を掲げ、かつ極秘に下達したことである。実際、瀬谷が、「一撃作戦」に回した兵力は支隊全体の3分の1以下に過ぎず、命令の目的は一撃作戦のためではなく台児庄からの引き上げであることが一目瞭然であろう。もちろんこの極秘命令と支隊撤退の意図を1530、前到来した坂本支隊の二組の連絡者に伝えておらず、戦闘指

揮中の赤柴第十聯隊長も、命令受領に将校の派遣が要請された取り扱いから、うすうすと「事ノ重要ナルヲ洞察」し²、命令に接して初めて瀬谷支隊長の意図を知った。

瀬谷は兵を西側と東側に二分し、主力は西側ルートで泥溝方向に後退し、泥溝北西箒山と白山の間を通過して臨城に北進する計画だった。また命令において、戦闘力の高い歩兵第十聯隊を西側退路の搜索、援護に配置した。

瀬谷支隊の転進命令を受け、赤柴聯隊長は1705、「赤作第四十五号命令」を下達し

第一大隊ハ日没ト共ニ南洛附近出発、随所ニ敵ヲ撃破シ白山西（嶧県西南約2里）東西高地ノ線ヲ占領シ支隊ノ左側ヲ掩護スヘシ

また、直ちに黄林庄（台兒庄東南東2キロ）の守備を担当する第一中隊と、頓庄閘（台兒庄西9キロ）守備を担当する第八中隊に打電すると共に、插花廟攻撃中の第二大隊第七中隊にも攻撃中止と南洛への集結を命じた³。前記した輸送用の戦車一台が撃破され、第八中隊は戦車の積載弾薬糧秣を「自爆焼却」させ、避難した戦車兵3名を收容して、撤退の途についたのも⁴、この撤退中の出来事である。

命を受け「第一、第七、第八中隊ハ日没ヲ待チ巧ニ敵ト離脱シ克ク中隊団結ノ成果ヲ挙ケ死傷者ヲ收容シ敵ノ近ク追尾スル中ヲ一兵モ損スルコトナク午後十一時無事南洛ニ集結完了シ」、愁眉する聯隊長を安堵させた⁵。部隊は聯隊本部、軍旗中隊、通信班、第二大隊、第三機関銃中隊、歩兵砲中隊、速射砲中隊、戦車中隊、衛生隊、小、大行李、第七中隊、第一中隊の順で行軍列を組み、2400、南洛を出発し、黙々と北北西の泥溝（台兒庄北西15キロ）方向に向かって撤退しはじめた。第十聯隊の戦闘詳報が記す

馬枚ヲ銜ミ人黙シテ語ラス 後方炎々トシテ燃ヘツツアルハ夫レ台兒庄ノ辺リカ戰場寂トシテ声ナク我レヲ知レルヤ知ラサルヤ唯ノ野犬ノ遠吠ヲ聞クノミ 硝煙既ニ没シテ星斗燦タリ夜風快ク將士ノ頬ヲ撫テ過去週日東奔西走セシ戦闘ノ跡ヲ顧ミ洵ニ感慨無量ノモノアリ

歛堆（泥溝南方約六軒）ニ来リタル頃ホヒ敗残兵ノ射撃ヲ受ケ護衛直ニ応射、部隊ニ一抹ノ不安ヲ与ヘタルモ依然整然ト行進ヲ続行シ途中野戦重砲隊ト行進交叉ヲ惹起セシ外、サシタル支障ナク七日午前四時三十分鮑家庄（泥溝東北側）ニ到着部隊ハ此処ニ大休止ヲナス⁶。

つまり撤退に際して指揮官の緊張と兵士の無念さが窺えるが、歩兵第十聯隊の場合、計画通り、秩序よく安全に撤退を果たしたと言える。この撤退は部隊の士気と戦闘力に影響を及ぼさなかったことは、翌日以降行われた「高皇廟附近ノ戦闘」の状況をみれば、分かる。

4月7日夜明け0630、赤柴聯隊長は瀬谷支隊長から「瀬支作命第七十九号」を受領し、休む暇なく部隊はつぎの戦闘に投入された。敵の追撃部隊を阻止ならび監視するため、第六中隊と歩

兵第六十三聯隊第五中隊（台児庄城内から引き上げた部隊）は鉄道線の東側、敵に近い賈庄、蘭城店の占領を命じられ、主力は郝庄附近に集結し、白山西からくる敵の進攻に備えた⁷。この敵は台児庄方面から白山西方に迂回して北上してきた中国軍の包囲部隊で百十師の一旅であった。

敵がいる高地の北東側、先着した第十聯隊第一大隊（左側掩護部隊）はすでに高地占領して攻撃を控えており、第二大隊と砲隊は、敵の退路を遮断する任務に当てられた。この作戦を行うため聯隊主力は4月7日夜、泥溝北4キロに位置する呉寺に前進した。

この時、日本軍の撤退を尾行して既に台児庄の方向から敵部隊は大量に北上したため、この攻撃作戦にはとくに慎重を要した。優勢な敵部隊に包囲されないように、4月8日支隊からの「瀬谷第四十九号」電報では「貴隊ハ台児庄方面ノ敵ニ対スル顧慮上白山附近ノ攻撃ハ可成迅速ニ結末ヲ告クルコト緊要ナリ」と速戦即決が要請された⁸。

聯隊は4月8日1150、攻撃展開を完了し、野砲兵の援護射撃を受け1515攻撃を開始した。

午後三時三十分全線ハ勇躍攻撃ヲ開始ス 敵亦盛ニ「チェッコ」迫撃砲ヲ以テ我ヲ射撃ス而シテ寺院、岩窟内ニアル自動火器最モ其猛威ヲ逞ウスルヲ以テ野砲ヲ以テ之カ破壊射撃ヲ実施セルモ容易ニ所望ノ効果ヲ挙クルコト能ハス。敵銃弾、迫撃砲弾ハ盛ニ聯隊本部附近ニ落下シ 伝令兵等ニ死傷者ヲ出シ其最近ノ迫撃砲弾ハ軍旗側方二十米ニ落達シタル

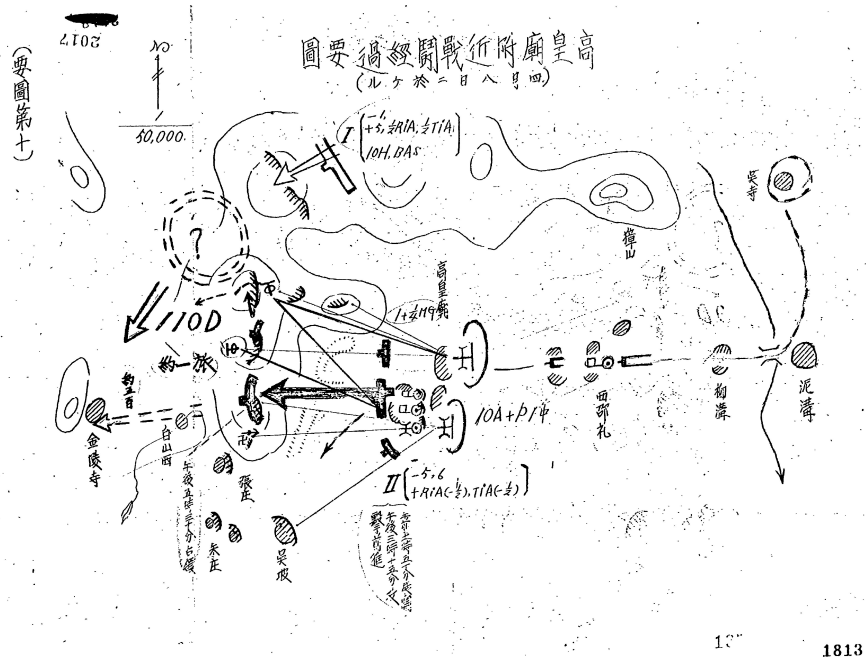
と、一時、作戦は手こずった。報告を受け、速戦即決を要求した瀬谷支隊長は不安になり、1645、「瀬谷第八十二号」電報で「…白山附近ノ攻撃ハ日没ヲ以テ中止シ其宿营地丁家埧、乱溝、黄家庄、李庄（嶧県東南約八軒）ニ前進同地ニ宿営スヘシ」と、攻撃完了に時間のリミットを設定し、執着を戒めた⁹。

第十聯隊長は日没までの勝負を目指して、1730突撃を敢行した。

第八中隊ハ砲兵集中射撃ニヨリ爆煙山頂ヲ覆ヘル中ニ猛然突入頑敵ト壮烈ナル手榴弾戦ヲ行ヒタル後之ヲ完全ニ占領シ…続イテ午後五時五十分第一中隊突入山頂ヲ確保シ更ニ北方ニ向ヒ戦果ヲ拡張ス。…敵約五百ハ金陵寺（高地西南約二軒）ヨリ退却ヲ開始ス 我第一線重火器ハ一斉ニ之ヲ猛射スレハ敵ハ将棋ノ駒ヲ倒ス如ク損害ヲ被リ 忽ニシテ潰乱ニ類ス此状況ヲ目撃セル将兵連日ノ疲労ヲモ忘レ思ハス快哉ヲ叫フ¹⁰。

【参考地図】

戦闘の結果として、「敵遺棄死体第百十師三二八旅六五六団第二營長以下少クモ四百下ラス」、第十聯隊側の損害は「戦死三負傷七ナリ」と、大勝を得た。敵400名を殲滅したのは、3月30日台児庄戦場に介入してから第十聯隊が挙げた最大の勝利であり¹¹、また敵手の百十師（長張軫）は第十三軍長湯恩伯配下の精鋭部隊であった。その後、第十聯隊は2100、西部高皇廟を出発し、2300、丁家埧附近に集結完了したのである¹²。中国軍側の戦闘記録（第二集団軍戦闘詳報）にも、



我追撃部隊が「敵の南下攻撃に遭い金陵寺方面に撤退」、「我追撃は敵の掩護部隊に阻止され進展なく、…敵の援護部隊は任務完遂のあと嶧県東北高地に退却せり」と高皇廟の戦いにおける不利を認めていた¹³。

4月8日に行われた高皇廟附近の戦闘結果から分かるように、瀬谷支隊の主力の一つ、歩兵第十聯隊は台兒庄から撤退した後も、高い戦闘力と士気を保ったままであった。

二 歩兵第六十三聯隊の場合

歩兵第十聯隊は台兒庄の戦場に三月末に投入された増援部隊で、城郊周辺の運動戦に使われ、大した損害を受けておらず、各戦闘においても勝ち続けた、いわば士気の高い部隊である。これに対して台兒庄攻撃の最前線で戦った歩兵第六十三聯隊の戦場離脱はどうだったか、見よう。

4月6日1530、下達した瀬谷支隊の転進命令「瀬支作命第七十八号」には、歩兵第六十三聯隊に対して

歩兵第六十三長ハ日没直ニ聯隊予備一中隊速射砲聯隊砲及在三里庄第三大隊ノ半部ヲ掌握シ 野砲兵第十聯隊ノ本部及野砲第一大隊(一中隊欠)ヲ指揮シ中川大隊方面ニ転進中川大隊及野砲兵第二大隊ノ二中隊ヲ併セ指揮シ 朱庄ニ向ヒ敵ヲ攻撃シ 歩第二十一聯隊ヲ救援シタル後同聯隊ト協力シテ餓虎橋附近ノ敵ヲ撃破スヘシ 城内ニ在ル諸隊ハ歩六三ノ第二大隊長ノ指揮ヲ以テ日没後速ニ集合シ 北進ヲ開始シテ泥溝ニ到ルヘシ

と、撤退と同時に翌日行われる「一撃作戦」を部署した¹⁴。

中川大隊とは、この日の払暁、一撃作戦のため瀬谷支隊長の命令で先に北上した第一大隊（中川廉少佐）のことで、後続主力部隊の増加および第六十三聯隊長福栄真平にこの「一撃作戦」の指揮を任せたことは、命令のポイントである。城内で作戦する第二大隊だけ（一部砲隊を除く）に対する泥溝転進の命令は、前線での損害消耗が激しく、継続作戦に不向きだと判断から来たのであろう。

支隊命令に基づき、歩兵第六十三聯隊長福栄真平は1645、裴庄東南無名部落の本部でさらに具体的な聯隊命令を下達した。

聯隊ハ日没後戦場ヲ離脱シ主力ヲ以テ潘墜附近ニ集中中川大隊方面ニ転進シ同隊及ビ10A主力ヲ併セ朱庄ニ向ヒ敵ヲ攻撃シ歩二一ヲ救援セントス
台兒庄城内部隊ハ日没ト共ニ隠密ニ準備シ遅クモ午後八時頃迄ニ戦場ヲ離脱シ…2SA主力ヲ掩護シ泥溝ニ移動集結スヘシ
戦線離脱ニ當リテハ攻勢ヲ装ヒ敵ノ察知ヲ防クコトニ特ニ注意スルヲ要ス
兵器弾薬材料等ニシテ自力ヲ以テ行動シ得サルモノノ搬出ノ為聯隊小行李馬匹ノ若干ヲ日没後直ニ城内ニ前進セシム
Ⅲ…ハ日没後第一線ニ歩兵一小隊、機関銃一小隊ヲ残置シ主力ヲ以テ日没後、残置部隊ヲ以テ午後八時頃其位置ヲ撤シ劉家湖ニ位置スル大、小行李ヲ掩護シ潘墜ニ集結スヘシ
合言葉ハ岡山、広島トス¹⁵

戦闘詳報によると、この時、台兒庄城内及び城外劉家湖などは後方基地で「弾薬、糧秣等の集積」が多量にあり、これを運び出す輸送手段は、車輛の破損と輓馬の死傷などで不足していた。そのため、撤退にあたって各部隊の間で馬匹と車輛を融通し、「止ムヲ得サルモノハ其位置ニ集積シ戦場離脱直前之ヲ焼却」すべきと命じられた。弾薬の焼却を指揮するため、「銃工曹長及下士官一名ヲ城内第二大隊ニ派遣」された¹⁶。残留弾薬を自爆するための技術指導である。

各部隊は敵に察知されないように日没とともに準備に着手し、「敵ノ盲射ノ中ニ在リテ搬出シ得サル諸品ヲ蒐集シ城内部隊ノ撤去ト共ニ之ニ火ヲ放チ其離脱ヲ容易ナラシメ第一線両大隊ハ概ネ午後八時其最前線ヲ撤シ爾余ノ部隊モ亦之ニ応シ各所命ノ行動」についた。

この時、台兒庄城内の中国軍は日本軍の撤退を察知したかのように、「徒に銃砲射撃を続け」、午後八時頃、城内及び劉家湖には弾薬及糧秣等の炎上する火光の中、聯隊全体は撤退し始めた。

中国の各種書物では特に日本軍の撤退する狼狽の様子を書きたて、《抗日戦史》徐州会戦では

4月7日2時ころ、邵家莊、劉家湖、陳家堂に残留した敵は、砲を壊し弾薬、家屋を焼き、大量の死体を残して嶧県に敗退した。包囲された台兒庄内の残敵も、背水の陣を敷猛反撃し、我軍の包圍殲滅戦で逃げ道を失い、家屋、弾薬を焼き、火の海に身を投げた。…四時、残敵が一掃され、我々は大量の武器、物資を鹵獲した。

とし¹⁷、別の政府記録にも「我呉団は裴庄占領し数えきれない装甲車、トラック、弾薬、輜重を鹵獲し、邵庄攻撃の時、敵は自ら装甲車、トラック50両を破壊し、馬100匹を射殺して潰退した」。「城内では逃げ場のない敵は百余名火に身を投じ焼身自殺した」¹⁸としている。しかし、歩兵第六十三聯隊が記録した数字は、焼却小行李(弾薬)20 大行李(糧秣、被服、其他個人私物)6であった。単位は陸軍の三九式輜重車(積載量220キロ)の荷台分であり合計約4.5トンであろう¹⁹。

聯隊長ハ台兎庄攻略ノ任務ヲ受ケ諸隊ヲ駆ツテ力戦奮闘スルコト一句 其間不尠ル犠牲ヲ拂ヒ日々ノ攻撃酸鼻ヲ極メタルモ逐日其地歩ヲ進メ状況ノ進展極メテ遅々タリト雖モ今ヤ漸ク略取ノ曙光ヲ見タル時 状況変化ノ為部下陣没將兵墳墓ノ地ヲ棄テ戰場ヲ離脱セサルヘカラサル苦衷遣ル方ナク深ク戰場ニ恨ヲ遺シ諸隊ノ撤退ヲ待ツ²⁰

と戦闘詳報は記す。

撤退は概ね計画とおりに順調に行われ、「敵ハ我ノ隠密離脱ヲ察知セス諸隊ハ各敵ノ妨害ヲ受クルコトナク肅々離脱スルコトヲ得タルモ台兎庄城内部隊ハ逐次東北門ヲ通過城外ニ出ツル際絶エサル敵ノ小銃重軽機関銃及ビ迫撃砲射撃ノ為若干ノ死傷ヲ生ス」²¹。

この「若干ノ死傷」は何人か、戦後、第六十三聯隊史が編纂された時の鳥根県庁の戦没者名簿と鳥取県護国神社の祭祀名簿から整理した精確なリストによると、4月6日における第六十三聯隊全体の死亡者数は以下の十名であり、場所が台兎庄と確認できるのは、7名であった。

三島源市	歩伍	八東郡宍道	台兎庄
石原徳市	歩伍	能義郡島田	台兎庄
鹿納義夫	歩軍	能義郡宇賀荘	一野戦病院
瀬田重男	歩上	能義郡安田	台兎庄
岩田徳夫	歩上	仁多郡亀嵩	台兎庄
法橋長次郎	歩少尉	大原郡斐伊	台兎庄
斎藤増一	輜重上	隠地郡五箇	支那
茶山破蔵	歩伍	東伯郡金市	一野戦病院
村岡清	歩伍	東伯郡上浅津	台兎庄
西村三二	歩上	西伯郡福万	台兎庄

戦後の史料なので、階級は死亡昇進一級の階級であろう²²。もちろん、この7名はすべて撤退時の死亡ではなく、昼間の死体の火葬、物資搬送時に、また戦闘時の死亡も含まれる(この日の台兎庄内の対峙、小競り合いと、一撃作戦のために北上して河湾、柿樹園、楊楼附近の戦闘損耗も含まれるはずである)。例えば城内作戦担当の第二大隊第五中隊の『渋谷昇日記』4月6

日条では、

林原君二人で足立君の遺体を收容所に送る。途中敵の迫撃砲弾しきりに落下、非常に危険。遺体を火葬場に集めた処、敵弾が益々盛ん、予は望楼に隠れしばらく待機。此間、本部三人が被弾負傷、第八中隊も八人が斃れる。第三小隊も遺体を送らる。午後七時、死傷兵の武器を集める。我が大隊は敵の攻撃に対抗できず、川辺に退却。敵弾益々猛烈。数百人の命と引き換えに占領した場所はまた敵手に落ちる。我が隊も涙をのみ大隊に従い後退。離別の際死んだ戦友に手を合わせて黙祷、すべての家屋に放火²³

撤退前(多分午後)の死体火葬の様子を描いているが、数人の死傷が確認できる。撤退時に武器を集めたり、放火したり、黙祷をしたりして、特別狼狽の様子ではない。

渋谷の第五中隊の場合、防衛庁に保管される中隊死傷者名簿に4月6日に死亡者1名負傷者7名を記録されている。さらに詳しく調べると、死者大西一男は1900、「右肩砲破」で死亡、他5名は1700、「砲破」で負傷している²⁴。1700は撤退行動が始まる前で、城内で脱出前準備の時、負傷したと考えられる。真に脱出時の死傷は、1900の大西一男一人のみであろう。

一方、撤退は全く察知されないところもあった。城外西北部に位置する第三大隊第十中隊兵士村上常雄の記録では

四月六日 午後七時十分、前記聯隊命令により、第十中隊も最前線をはなれた。後退ということは気持ちが悪い。すぐに敵は追撃してくる不安におそわれる。特に敵との距離三〇〇米で対陣してただけに、不安度は高い。が、その夜は彼我共に十余日に亘る戦闘で疲労しきっていたためか、敵より発砲しない限り我も又撃たずと、我が軍の発砲なきをよい事に敵さん寝ていたと見える。そして夜の中に全軍台児庄より後退したのである。²⁵

第三大隊は城西北の外で敵と対峙している部隊で、撤退中戦闘が発生しなかったことは記録から分かる。

このように、歩兵第六十三聯隊は城内で損害を受けた第二大隊を第十聯隊の指揮下に転出させ、残りの主力を挙げ、翌日に行われる「一撃作戦」のため、0120、台児庄北5キロの潘墜〔壘〕にて集結完了した。

撤退において、歩兵第十聯隊の「一兵も損することなく」に比べれば、歩兵第六十三は蓄積した相当な弾薬(約45噸)を焼却処分し、東北城門から脱出中「若干の死傷」を出したが、ほぼ無事に撤退できたと言える。撤退中の損失は、数人程度であろう。

前述のように、歩兵第六十三聯隊は翌日夜、一撃作戦の失敗で楊楼で二度目の隠密撤退を余儀なくされるが、これも、「四周敵ナル状態ニアリテノ戦線離脱ニ方リテモ攻勢ヲ以テ敵ヲ欺騙シ第一線ヲ出發シタルニ敵ニ我カ企図ヲ窺知セラレス全然損害ナク隠密ニ転進シ得タリ」²⁶。

三 坂本支隊の戦場離脱

坂本支隊の場合、歩兵第二十一聯隊や、第十一聯隊の戦闘詳報が残されていないので、4月7日昼の「一撃作戦」の様子は不明であるが、戦場離脱について聯隊史にある個人の日記、手記を通じてその一斑を窺える。内容を見よう。

戦場の北線に位置する歩兵第二十一聯隊(片野部隊)は、4月5日日没後、司令部が堡子にあり、近く平灘、郁庄、大顧柵に第三、第二大隊の兵力が展開し、北の常溝、丁灘、老宅、南東の除溝、東范墩 西范墩 黄淵の敵と対峙していた。これまでの激しい戦闘で第三大隊の実力(定員約1000)は「小銃兵力四ヶ小隊」(200名ほど)に激減した²⁷。7日払暁、敵は近くの朱庄、黄淵に進出し、東范墩附近の敵榴弾砲陣地からの砲火を蒙り、「我が軍は人員馬匹に相当の損害を受けた」。午後4時、堡子附近砂山高地を確保中の第十中隊に片野部隊長の撤退命令が伝達された(要旨)。

- 一 瀬谷支隊ハ全カヲ以テ賀庄方面ニ転進シテ我カ左翼ノ敵ヲ攻撃中
- 二 支隊ハ現在ノ位置ヲ撤退シテ沂州攻撃ノタメ進出ス
- 三 聯隊ハ支隊命令ニヨリ日没ト共ニ着々出發準備ヲ完了シテ本夜十一時第一線ヲ撤退シマツ平灘ニ集結シテ沂州ニ向ッテ転進ス
- 四 第十中隊ハ現位置ニ於テ聯隊ノ転進ヲ援護シ十一時平灘ニ帰着スヘシ
- 五 合言葉広島岡山²⁸

こうして「兵員僅か30余名の中隊」は砂山で聯隊の転進掩護の重大任務を任せられ、緊張と不安が交差するなか、「敵の視覚をこの砂山に牽制する永い時間が続き」、遂に命令を完遂して無事平灘に帰着した。

その後中隊は後衛尖兵となって聯隊の最後尾を警戒しながら前進した。敵は我に肩接して追尾したが、敢えて積極的な攻勢には出ない。敵の撃つ螢光弾が長く尾を引き頭上を掠めてゆく。部落のあっちにもこっちにも火の手があがり、敵が得意とする部落焼き払い戦術である。部隊は黙々と進み敵と完全に離脱して四月八日午前三時三十分の夜明け前に腰裏徐に到着した。ここで一時間の休止をとった²⁹。

同じく4月7日、堡子にいた岸本の記録によると、転進命令は午後4時に伝えられ、午後10時隠密裡に行動を開始した。日記には必死な脱出の様子が記されている。

午後10時隠密裡に堡子を撤退し、戦線を整理して攻撃を再興することになり転進を開始する。敵は日本軍の転進を察知したか、我が縦隊の右に左にさらに前方の部落に、敵の赤、青の信号弾が盛んに打ちあげられる。負傷した将兵は大行李の輜重車の荷をおろして部落内に埋めて隠匿して、その輜重車に縛りつけて、部落と部落の間の道なき畑の

中を敵中突破して走り抜ける。傷の痛みとうんうん唸る負傷兵の苦しみ、死なずに頑張ってくれよと唯々祈るのみで、どう看護してやることもできない。前に行く兵隊と離れないよう気をつけるのが精一杯で終夜行軍を続ける。

なお岸本の記録では4月1日から4月7日の台児庄応援作戦に関して、第二十一聯隊は死傷者233(内死亡51)名であった³⁰。

次は、『浜田聯隊第十中隊史』にある片野部隊伍長石橋郡市の記録である。この時第十中隊は火石埠の高地を堅守中であつた。苦戦中弾薬糧秣がつき、はぐれて暗夜脱出中、あわや中国軍に遭遇する様子を記録している。

七日朝から敵の砲撃は激しく、麦畑を指揮官の青龍刀がちらつき、散兵が果敢に突撃して来たりて我が陣地に迫り、彼我入り乱れての激戦となる、…分隊は、弾薬、食糧全く無く転進することを決した、…第一分隊は高地北端に在りて、夜間行動を起こすや敵に察知され、砲撃を受けるも巧に避けて転進し、部落に近寄ったところ支那軍であり慌てて反転し、次の部落ではよく確認し広島輜重隊であり合して行動し、八日午前藁莊附近にて中隊に復歸した³¹。

一方、蒲汪にいた坂本支隊長野部隊（歩兵第十一聯隊）の場合、4月7日1500、19時を期して蒲汪を撤退し嶧県北方地区に集結すべきことを命ぜられた。聯隊主力は午後7時50分陳瓦房西方の邢家楼（蒲汪北東三キロ）に集合し、同日午後10時30分、目的地の紅瓦屋屯（邢家楼北東18軒）に向い、聯隊本部、第一大隊、速射砲中隊、聯隊砲中隊、第三大隊の行軍序列を以て転進を開始した。「夜間主要道を避け星を指標としながら麦畑、湿地のなかの行軍は馬匹部隊にとっては難渋甚だしかった」³²。

聯隊本部を警護する第三中隊の記録を見れば、転進は2230から始まり、聯隊は「第三大隊一ケ中隊—通信班—聯隊本部—軍旗中隊—第三大隊の残余—第一大隊—聯隊砲—速射砲—第三中隊—聯隊大行李—独機—聯隊小行李—第一中隊」という序列を組み整然と行われ、中隊には「元氣旺盛ニシテ一名ノ落伍者モナシ」と記録されている。「途中砲兵聯隊ガ進路ヲ誤リシ為後方ヲ行軍中ノ我聯隊モ進路ヲ誤リ大迂回ヲシ途中一山部落ニ於テ大休止ヲナシ目的地紅瓦屋屯ニ達ス」と³³。なお、警備担当のためか、該中隊は4月1日から転進までの間、戦闘状態に入ったことは一度もなく、兵員はずっと「曹長以下63名」のままで、損害も期間中砲弾で負傷した澤田豊重上等兵一名だけであつた³⁴。

しかし決してすべて順調ではなく、前記行軍序列に「残余」と記された第三大隊には、トラブルがあつたようだ。撤退掩護で最後方に残された聯隊の通信班、下紺軍曹以下5名は敵陣に残され孤立し、通信線を頼りに、敵の信号弾および周囲の部落の火炎の光で方向を確認しながら、必死に巻線機を巻いてようやく転進部隊の後尾に追いついた。また、撤退中蒲汪附近の遭遇戦で大腿部の貫通銃創を負った第三大隊砲小隊長村上哲二准尉も、寺木正春上等兵に背負われ「夕

闇迫る戦場を部隊を求めて追求しようとした」が、「暗夜に吸い込まれ、翌朝聯隊が嶺県に達した時にはその姿を見出すことはできなかった」と³⁵。

他に賀庄の防御に終始した第十一聯隊第一大隊歩兵砲小隊の場合、4月1日林屯の戦いから4月7日賀庄より転進するまで、全隊53名、馬24匹の中、合計兵4名が負傷し、4月7日「転進時午後八時古本軍曹（頭部貫通）負傷入院ス 支那馬敵弾ノ為二頭戦死ス」と記録していた、一週間における初めての馬匹の死亡報告である³⁶。

以上のように、4月7日夜における坂本支隊の「転進」は、昼間の一撃作戦の不発で非常に困難な状況下に行われる事になったが、中国軍による夜間の積極的進撃、追跡はなかったため、ほぼ順調に戦場離脱を実現した。転進中の損失、犠牲には一部の大行李の隠匿埋没が記録されたほか、転進による犠牲者は数名程度であったと思われる。坂本支隊の戦場離脱は北に向け、敵陣（防御線）を通らなければならなかったが、道路をさけ、村の間をぬける夜間行軍で、無事に目的地に達した³⁷。

坂本支隊の戦場離脱は、瀬谷支隊より困難が大きいと思われるが、実際の様子を見れば、決して敗退、潰退の様子ではなかったといえる。

第九節 「反転」と「敗北」論について

以上の実証結果を踏まえて、「台児庄の戦い」における「反転」と「敗北」論の問題点をもう一度整理してみよう。

一 台児庄における日本軍の撤退について

1938年4月6日～7日の台児庄戦場における日本軍の撤退は果たして戦略的「転進」なのか、それとも攻撃を受けた潰退、敗退なのか？本論のはじめに、筆者は、一、4月7日前の「反転」、撤退命令の存在か否か、二、撤退の事実は無秩序の潰退か、それとも計画的撤退、転進か、三、その後の行動及び戦闘力の如何という三つの判断基準を提示し、実証した。その結果を踏まえ、それぞれの答えを見よう。

一に対して、本論の実証結果から見れば、「反転」は4月5日午後、坂本支隊長宛「板参甲第二〇七号」によって下達された命令であり、すなわち既成の方針に従って「反転」が行われたといっても、間違いとはいえない。赤柴八重蔵元聯隊長らの弁は、一応事実であることが立証されたわけである。

また二に対して、本論における瀬谷、坂本両支隊の反転実態の実証、分析を見れば、日本軍の戦場離脱は、計画による組織的、秩序的行動で、決して中国側が主張した無秩序な敗退、大きな損失に伴う潰退³⁸ではなく、撤退中の死傷も十名程度で僅少だったことがわかる。

さらに三に対して、撤退後4月7日、歩兵第六十三聯隊による底閣、楊楼附近の戦闘、翌日歩兵第十聯隊による高皇廟附近の戦闘が行われ、ともに、防御ではなく、計画中の攻撃であった。結果を見れば、戦闘力の差があらわれたものの、両聯隊とも継続的戦闘の組織、攻撃能力を維持していることが立証される。

すなわち、日本軍の台児庄からの撤退は、決して中国軍の反撃による敗退、潰退ではないこ

とが言える。

二 戦略的敗北、失敗について

しかし、問題は決してそれだけで終わらない。台兒庄における日本軍の戦略的敗北、作戦の失敗は果たしてないか。

まず「反転」に関していえば、第二軍および第五師団から確かに坂本支隊に対する「沂州反転」の命令が出されたが、それは瀬谷支隊の撤退を命令、指示するものではない。つまり先に撤退した瀬谷支隊の行動は、決して「反転」行為に当たらず、苦境を脱出するための独断な戦場離脱行為であると、言わなければならない。

また、坂本支隊の沂州反転に関しても、「速に当面の敵を撃滅したる後」の先決条件がついており、この条件は第二軍から最後まで執拗なほど、繰り返して強調されたのである。すなわち、軍や師団側が要望したのは、台兒庄の陥落と敵の撃退後の、勝利の転進だったのである。これに対して瀬谷支隊は台兒庄を陥落したわけではなく、坂本支隊も敵の背後（胡山、禹王山）に進出し、台兒庄周辺の敵を撃破したわけでもない。

つまり瀬谷支隊の「撤退」と坂本支隊の「反転」は同じように、それぞれ当初の作戦目的に達しておらず、作戦の不利、失敗にともなう退避行為だったと言える。この意味で言えば、戦略的に中国軍が台兒庄とその周辺の防御戦に成功し、日本軍側が敗北して戦場から撤退したのは事実である。この事実はまた、戦闘詳報などに記録された、台兒庄戦場の歩兵第六十三聯隊（特に第二大隊）及び坂本支隊歩兵第二十一聯隊の戦闘消耗の数字データから確認できる。台兒庄の戦場において、日本軍は終始攻撃側の立場を占めるが、実際の攻撃力は、歩兵第六十三聯隊による4月7日の底閣、楊楼附近の戦闘（一撃作戦）結果を見れば、相当に低下した事実が否めない。

三 瀬谷啓の責任問題について

戦前から旧日本軍の関係者を始め、長い間、台兒庄の敗北を認めず、撤退の責任を無断撤退を命じた瀬谷啓支隊長個人に押し付け³⁹、また瀬谷、坂本両支隊の間の連絡手段の不備による意思疎通の問題に帰する傾向があった⁴⁰。日本軍の名誉を守るための、責任転化行為である。

本研究の結果を見れば、まず連絡手段の不備による意思疎通の問題が否定されるべきだろう。確かに電報にふれた「軍無線なき」⁴¹という「通信不備」の問題点はあるが、この間残されている坂本支隊の電報だけで25通にのぼり、支隊と師団、軍、あるいは両支隊間の電報が毎日大量に交わされただけでなく、支隊の作戦命令にも友軍の場所、状況、敵情、作戦意図が克明に記されている。また、連絡者派遣という人的通信手段も毎日複数回交わされていた。激しい戦局の変転、あるいは作戦に専念する中、丁寧な対応が実現しにくいことは事実であるが、連絡面の情報伝達には、大した支障はなかったと思われる。あったのはむしろ、両支隊間の利害面の思惑、疑念ではないか。苦境の下、坂本支隊に対する軍、師団の反転命令は、瀬谷支隊長の不安、疑念（裏切られるのではないか）を刺激し、逆にみずから吐露できない心情と作戦部署（秘密戦場離脱）は坂本順支隊長の怒りを誘った。もともと、坂本は敵を撃滅するまで自分は決し

て先に退かない「義理」を瀬谷に示し、瀬谷も最後まで坂本支隊の救援（一撃作戦）を忘れなかった。両支隊を苦戦に陥れ、また齟齬、不調和を生じさせたのは通信手段の不備ではなく、苦戦の現実を無視した、上級指揮部（特に作戦参謀等）の無理な戦果要求ではないか。

瀬谷の独断撤退は、長い間注目され、戦後論争にまで発展した⁴²。しかし注目すべきは、なぜ瀬谷の台児庄撤退は問責されず、その後の作戦指揮、昇進にも影響しなかったかである。普通軍紀問題になるはずであるが、それが責任問題にならなかったことは、陸軍内部の責任もみ消しではなく、その決断の正しさはその後、認識されたのではないかと筆者が考える。

瀬谷は4月4日の組織攻撃の失敗から、台児庄の陥落を諦観し、無駄な犠牲を避けるため退き時を考え始めたと思われる。しかし、5日の反転命令は、坂本支隊に対するものであり、自支隊の撤退を指示するものではなかった。この危機状態の下で、もし友軍が撤退すれば、台児庄の戦闘を片付けるどころか、場合により支隊全体が包囲され全滅する危険さえ孕む。6日、瀬谷は「兵力ヲ後方ニ集結スルノ決心ヲ為シタルモ」、「師団長ハ之レニ全然反対シ依然攻撃スベキヲ命セリ」と、まったく受け付けてもらえなかった⁴³。その後、8日夜の坂本、瀬谷両支隊の北方への後退意図に対しても軍は「両支隊万一既ニ行動ヲ起シアラハ直チニ之ヲ停止シ万難ヲ排シテ本夜中ニ昼間ノ位置ニ復帰セシメタルヘシ」と厳命する強硬ぶりであった⁴⁴。このような場合、瀬谷は下手な「具申」が結局自主行動の邪魔になりかねないと判断し、自ら秘密裏に行動を起こしたのではないかと。このような背景にあった私的決断だったので、事前に坂本支隊長に知らせなかったと思われる。秘密保持の軍紀面の理由だけでなく、公式に知らせにくい理由もあった。

つまり、支隊全体の存亡に関わる問題に面して、瀬谷はリアリズムの立場で、命令、軍紀、また個人の責任、名誉などを度外視して、個人の決断で対処したのである。この行動は結果から見れば正しかったことは、この後の軍の評価をみて分かる。

「第二軍作戦経過概要」に瀬谷支隊長の行動を、「速ニ台児庄附近ノ紛雜煩鎖ヨリ脱却シ殊ニ未然ニ被包圍ノ不利ナル態勢ヨリ離脱シテ機動ノ自由ヲ獲得スル」ための行動と評価した⁴⁵。また、当時の作戦参謀稲田正純も戦後の証言において、台児庄の撤退は戦略的転進で、正しい判断であったと、つぎのように話した。

〔台児庄の戦闘で〕 瀬谷、坂本両支隊の台児庄からの後退は戦況から見て当然である。当時、方面軍や第二軍がなぜもっと早く後退させぬかと、じれったい感じていた。台児庄からの後退は敗退ではなく、いずれ下がることは大本営と初めからの約束であるから問題にしていない。台児庄方面に「湯恩伯軍出現」の情報を得たとき、これはえらいことになった、前に出過ぎている第二軍の一部を早くまとめないと危ないと心配した。湯恩伯軍の出現は蒋介石主力が決戦を求めてきたことを意味するからである。瀬谷、坂本両支隊が危機を脱して後退したので、安心するとともに、敵の主力を寄せつけた結果となったので、それでは徐州作戦をやろうということになり、急いで準備に取り掛かった⁴⁶。

稲田は1938年3月、不拡大派河辺虎四郎の後任で参謀本部の作戦課長に就任した人物で、南部山東作戦を強引に推進した張本人と言われる。以上の証言はもちろん瀬谷支隊撤退の当時の話ではなく、その後における軍指導部の瀬谷評価であろう。稲田は当時、決して「早く後退させぬかと、じれったい感じ」る方ではなく、後退の中止厳命する強硬意見の持ち主であったと思われる。とにかくその後、軍上層部の幾分の自己反省と後の徐州作戦の勝利から、瀬谷の決断の正しさが認められたことが、問責、処分が行われなかった理由であろう。瀬谷啓はその後も歩兵第三十三旅団長であり続け、支隊を指揮して武漢、長沙作戦などに参加したあと、1939年、勲二等を授けられ中將に昇進している。

四 中国軍の勝利について

台兒庄の局部戦闘において、日本軍が撤退し、中国軍が最終的に勝利を得たことは、間違いない事実である。軍事面の勝利というより、その影響が拡大宣伝による政治面にあると、筆者はかねて指摘していた⁴⁷。一方、「大捷」と称賛され続けたこの戦いに、やはり反省すべき点があるように思う。

まず指摘すべき点は、勝利側の中国軍の主動的攻撃力の欠乏である。台兒庄の戦いの全体を見れば、日本軍は終始進攻側であり、対して中国軍は基本的に防御側であった。このような態勢は、各種の戦闘記録から読み取れるし、当時の戦場経験者で歩兵第六十三聯隊副官安田享介中佐も、こう言った。

日本軍は終始、支那軍に対し主動的に攻撃し、支那軍はほとんど守勢的に行動し、上層部の用兵は何らであってもその前線部隊は常に防勢に立ち、土工作业につとめ、日本軍の兵力寡少であると見れば強く抵抗し、時には頑強に守備したものであった⁴⁸

問題はこの守勢にあるのではない。守勢を守り続けた中国軍は、最後まで積極的な攻撃に出ず、6～7日の夜間、日本軍の撤退を察知しても、追撃、迎撃をせず、敵の安全撤退を許したことにある。不利な戦闘展開の下で行った日本軍の大規模な撤退は、決して簡単なことではなかった。夜中の脱出は、道路を避け、湿地や麦畑のなかに重い火炮を引きずり、また弾薬、大行李まで処分して車輛を融通し、負傷兵を輜重車に縛り付けて行われなければならなかった。事前の隠密裏の計画と細かい命令、指示から、両支隊長とも相当な損失を覚悟していたと思われる。しかし、実際の撤退中、それに対する中国軍の追撃作戦はほとんど行われず、4月7日夜、一撃作戦に失敗して多くの負傷兵を抱えた歩兵第六十三聯隊主力の楊楼、底閣からの再度の撤退も、敵側が「多数ノ兵力ヲ擁シアリタルカ如キモ何等積極的ニ我ノ行動ヲ妨害スルノ挙ニ出テス」⁴⁹ため成功し、包圍網に閉じ込められた坂本支隊も、「敵は我に膚接して追尾したが、敢えて積極的な攻勢には出ないため⁵⁰、無事に脱出することができた。7日午後、泥溝東方蘭城店に敵の行動監視の任務についた歩兵第十聯隊第六中隊（高田道好大尉）の百人あまりも、北上する5000以上の敵の大軍に四方を囲まれ、独力の脱出が不可能と判断され、しかも救援も「全

般ノ情況上絶対ニ許可セラレス」窮境に陥りながら、夜中、「天佑ナル哉敵ハ陣地ヲ撤去シ部落ニ集結」したお陰で、全員無事に脱出することができた⁵¹。こうした台兒庄の戦場における中国軍側の消極的姿勢のお陰で、瀬谷、坂本両支隊はさしたる損害を蒙ることなく難を逃れたのである。

次に指摘すべきは、徐州作戦の戦略的眼からみれば、中国軍は台兒庄の架空の勝利に自己陶醉し、日本軍の徐州作戦の企図に気づかず、大勢を以て引き続き第二軍と決戦を求めたため、徐州の救援を怠ったことである。4月7日の時点で、決戦を求めて山東南部に集まった中国軍の主力は30数個師があり、第二軍は、この時、徐州作戦の第一期において、「韓莊、嶧県、沂州ノ線附近ニ於テ敵ヲ抑留スル」という誘引作戦の任務が与えられた⁵²。その後5月上旬まで、第二軍の部隊は南部山東で中国軍と艱難なる周旋をしつづけ（第二期南部山東剿滅作戦）、台兒庄作戦以上の莫大な犠牲を払って誘引作戦を成功させ、徐州の陥落を容易にした。中国では政治的に創出した「台兒庄大戦史観」の影響で、台兒庄の大捷と徐州の敗北を峻別し、時期区分まで勝利の象徴たる4月7日を以て終わりとするが、台兒庄の勝利と徐州の敗北の間は、果たして無関係だったであろうか。戦勝の驕りは敗北を招いたのではなかろうか。

第十節 終わりに——台兒庄の敗北と徐州会戦の契機

徐州作戦はいつ頃決められていたのか。中国における多くの研究は1938年1月下旬からの「池淮阻撃戦」（日本側名「池河、明光の戦い」）、3月15日から18日の「滕県防衛戦」、3月中旬から下旬の「臨沂防衛戦」（日本側名「沂州作戦」）を「緒戦」として「台兒庄大戦」に組み込み、1月下旬から4月7日の間の、日本の北支、中支方面軍の津浦線打通作戦に対する徹底抗戦の勝利として台兒庄の大捷を位置づけさせ、作戦における日本軍の最終的目標は南北の挟み撃ちによる徐州の攻略である、そして、台兒庄の勝利はその企図を阻止、延期させた、とする。

例えば、韓信夫は、「日本軍荻洲立兵の第十三師団は鎮江、南京、蕪湖より揚子江渡河し、津浦線に沿って北進して、北側より南下した日本軍と呼応して一挙に徐州の占領を目指していた」。「始めは中支方面軍が主攻、北支方面軍が助攻の方式を取り、南路の部隊は淮河で釘付けられる（「池淮阻撃戦」）と、今度北支方面軍の主攻に戦術を変えた」と主張する⁵³。公式な見解として、台兒庄大戦記念館の碑文にも板垣、磯谷両師団は「台兒庄を速攻して後徐州を取り、津浦線の貫通を目指した」と刻まれている（程思遠・李宗仁の秘書文）。

すなわち、日本軍は1937年末から津浦線の打通と徐州の陥落を目指して南北の挟み撃ち作戦を開始していたという主張（＝台兒庄大戦史観）はその特徴である。確かに戦略的構想、あるいは軍の参謀たちの具申意見にこのような作戦構想が窺えるが⁵⁴、それを日本軍（大本営参謀本部）の計画と作戦部署だとする説は間違いである。

津浦鉄道の南北貫通を目指した日本軍の徐州作戦はいつ頃計画、部署されたか？

戦時中、陸軍大学校が作成した『北支作戦史要』に、原史料を用いて参謀本部による徐州作戦の内定は4月3日で、正式な決定は4月7日の奉勅命令「大陸命第八四号」による、と明記している⁵⁵。前に触れた参謀本部作戦課長稲田正純の証言にも、台兒庄における日本軍の撤退、中国

軍主力の集結が徐州作戦の契機を作ったとしていた。

つまり、1月下旬の中支方面軍による「池河、明光の戦い」を3月の北支方面軍による「南部山東剿滅作戦」（沂州、台兒庄作戦）とリンクする「津浦線打通作戦の説」は「台兒庄大戦史観」の見解であり、日本軍の史料からその存在が確認できない。

そもそも明光、池河で渡河作戦を試みた第十三師団（荻洲兵团）は、1938年初「津浦鉄道ニ伴フ地区ニ警備ノ重点ヲ移転スル」鉄道「警備」のための部隊であり⁵⁶、作戦に関わった歩兵第百十六聯隊長添田孚大佐も、その上司で第二十六旅団長沼田徳重少将も、明光の「北地区警備隊長」に命名されている（1月25日交代）⁵⁷。一月下旬、中支方面軍より淮河北岸における「鳳陽、蚌埠附近の敵撃滅」作戦が認められたが、それも「作戦後は現駐地に帰還するよう」指導されていた⁵⁸。すなわち、明光、池河の日本守備部隊は、淮河、池河を超えた掃蕩作戦を実施しても、北上して徐州を撃つ意図も、また権限もなかったといえる。

北支方面軍も同様である。第二軍の南下作戦の企図と度重なる具申は、三月上旬まで大本営より却下され続けており、3月13日ようやく認められた第二軍の南進作戦も、「眼前の敵を追い払い」「深く南進する作戦」をしない約束のもとで行われたものであった。作戦範囲は「南部山東」に限定され、「第十師団に対し大運河以北の敵を撃滅したる後は概して滕県及び其南方地区を確保して治安肅正に任せしむべき」旨を指示されていた⁵⁹。韓荘、台兒庄の運河線は作戦南端の境界線であった。

要するに、徐州の陥落と徐州会戦の発動は決して日本軍当初の計画ではなく、台兒庄作戦の敗北とともに現れた情勢変化——南部山東における敵兵力の大量結集——を利用し、自らの失敗を有利な戦略的攻勢に展開するための、臨機応変の挽回策であった。この徐州会戦のきっかけを作った意味でいえば、敗者の瀬谷支隊と坂本支隊は、また台兒庄の敗戦を徐州会戦の勝利に導いた立役者と評価して、良いかもしれない。

注

1. 「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号 JACAR(アジア歴史資料センター)：Ref.C11111171900. No.1789.
2. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号JACAR：Ref.C11111171900. No.1787.
3. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号 JACAR：Ref.C11111171900. No.1794.
4. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第十三～十四号 Ref.C11111171900. No.1769-1770.
5. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号 JACAR：Ref.C11111171900. No.1796.
6. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号JACAR：Ref.C11111171900. No.1796-1797.
7. 0700下達「赤作第四十六号」聯隊命令を参照、JACAR：Ref.C11111171900. No.1798.
8. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号 JACAR：Ref.C11111171900. No.1802.
9. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号 JACAR：Ref.C11111171900. No.1805,1806.
10. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号JACAR：Ref.C11111171900. No.1809 No.1810.
11. ほかに六回の戦闘を経験したが、敵に与えた損害数は合計750であった（前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号JACAR：Ref. C11111172500. No.1838.
12. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号JACAR：Ref.C11111171900. No.1812.
13. 『台兒庄戦役資料選編』同編輯組、中国第二档案馆資料編輯部、中華書局、1989年、12-13頁。
14. 『歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報』JACAR：Ref.C11111253800. 1082-1083.
15. 前掲『歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報』JACAR：Ref.C11111253800. 1086-1087.

16. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報』JACAR：Ref.C11111253800. 1088.
17. 《抗日戦史》徐州会戦(3)、前掲《台児庄会戦》第二次中日戦争各種重要戦役史料彙編、75頁より引用。
18. 《国民政府軍令部戦史会档案(廿五)3338》第二档案館。
19. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報』JACAR：Ref.C11111253800. No.1089.
20. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報』JACAR：Ref.C11111253800. No.1089.
21. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報』JACAR：Ref.C11111253800. No.1090.
22. 筆者が『歩兵第六十三聯隊史』（同刊行委員会、非売品1974年）604-826頁「戦没者名簿」の中より整理。
23. 曹聚仁《中国抗戦画史》1947年、2011年、中国文史出版社再版、271頁。原文中文、拙訳。
24. JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C11111266700、歩兵第六十三聯隊第五中隊 戦(病)死傷者名簿。但し、死者大西一男は、聯隊史の名簿から見当たらない。遺漏されたと思われる。
25. 『支那事変の想出』非売品、支那事変元松江歩兵第六十三聯隊第十中隊戦友会、1972年、66頁。
26. 「楊樓附近戦闘詳報 (第6号)」JACAR：Ref.C11111571500.No.1229.
27. 歩二一會『濱田聯隊史』、1973年、205頁。
28. 前掲『濱田聯隊史』、208頁。
29. 前掲『濱田聯隊史』、208頁。
30. 「岸本日記」『浜田聯隊秘史』1987年、190-191頁。
31. 『浜田歩兵第二十一聯隊 第十中隊史』浜田聯隊第十中隊編集委員会、1989年、37頁。
32. 『歩兵第十一聯隊史』鯉十一會編、非売品、1993年、298頁。
33. 「歩兵第十一聯隊第三中隊陣中日誌」JACAR：Ref.C11111177700. No.911.
34. 前掲「歩兵第十一聯隊第三中隊陣中日誌」JACAR：Ref.C11111177700. No.903-No.911、参照。1名負傷、1名帰隊で相殺、中隊人数63名は変わらなかった。
35. 前掲『歩兵第十一聯隊史』、298頁。
36. 歩兵第十一聯隊第一大隊砲小隊 陣中日誌」JACAR：Ref.C11111179100 No.1530-1541参照。
37. 歩兵第十一聯隊第一大隊砲小隊の例を見ると、該部隊は4月1日蘭陵に入る前の林屯の戦いから4月8日賀庄から紅瓦屋屯に転進完了の間、小隊の構成は人員53馬匹24から人員48馬匹22に消耗したが、激しい戦闘の割に大した消耗とはいえない。7日の戦闘で1名負傷入院の記録があるが、夜間の脱出も全人馬無事であった『歩兵第十一聯隊第一大隊砲小隊 陣中日誌』JACAR：Ref.C11111179100.No.1530 No.1542.
38. 学術性の高い研究書において、史料により日本軍の自主撤退を認めているが、秩序的撤退を否定し、撤退中戦闘が続き、日本軍が多く城内に取り残され、焼身自殺したとの記述が見られる。例えば、郭汝瑰・黄玉章は《中国抗日戦争正面戦場作戦記》において「相当な一部の日本軍は城内に残され、撤退中殲滅された」とし、また日本軍が敗退した際、「僅か2門しかない15種榴弾砲及び牽引車4輛、戦車8台を戦場に遺棄した」としている(郭汝瑰・黄玉章《中国抗日戦争正面戦場作戦記》(江蘇人民出版社、第2版、2005年、706頁)。同様な記述は王輔《日軍侵華戦争 1931 - 1945》にも見られる(遼寧人民出版社、1990年、771頁)。
39. 当時軍参謀たち(岡本清福ら)の「判決」では瀬谷の不思議の行動を両支隊長の間の信頼関係に問題在り、また「反転」行為は「戦争の真最中で今行かれたなら乃公が困まる」という瀬谷支隊長の拒否反応に帰し、軍は瀬谷支隊長に対する転進命令もしておらず、「弾薬もどんどん補充せられて居る(臼井勝美、稲葉正夫編『現代史資料』12、日中戦争4、みすず書房、2004年、520-522頁)。結局「其の間全く不可解なものがあるが結局分からない」としている。
40. 例えば、戦時中の史料と思われる防衛庁史料「北支方面作戦記録1-2 徐州会戦」(原稿、作者不詳)に「坂本支隊長反転の通報は瀬谷支隊長に勘からざる衝動を与ふ。之に端を發して軍及兩師団並兩支隊長間に複雑なる経緯を生ずるに至りしが各司令部間の通信連絡意の如くならず六日夜瀬谷支隊長先づ台児庄附近の戦場を離脱し翌七日夜坂本支隊長亦戦場を離脱するに至る。軍司令官は七日兩支隊長をして依然攻撃を続行せしめんと企図せるも兩支隊長既に移動中にして命令適時到達せず」と兩支隊長間の意思齟齬を強調している。JACAR：Ref.C11111708200. No.822-823.
41. 日本軍の通信手段には、師団内部の師団無線と、師団間の軍無線がある。軍無線がない場合、所属の違う兩支隊長(兩師団)間の通信は困難となる。これも、坂本支隊長が4月9日、第十師団の指揮下に一時配属転換した理由である。
42. 伊藤正徳『軍閥興亡史』3、文藝春秋新社、1958年、78頁。

43. 「北支那作戰史要」「青島問題及台兒莊附近の戦闘」JACAR：Ref.C11110923500. No.476-477.
44. 前掲「北支那作戰史要」「青島問題及台兒莊附近の戦闘」JACAR：Ref.C11110923500. No.480.
45. 「第二軍作戰經過概要」JACAR：JACAR：Ref.C11111014100. No.273.
46. 『戦史叢書 支那事変陸軍作戰(2)昭和十四年一月まで』防衛研修所戦史室、朝雲新聞社、1980年、44頁。
47. 拙論「日本軍の戦史記録と台兒庄敗北論」『岡山大学文学部紀要』63、2015年7月、参照。
48. 前掲『歩兵第六十三聯隊史』、434頁。
49. 前掲『歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111253900. No.1128.
50. 歩二一会『濱田聯隊史』、一九七三年、208頁。
51. 前掲「歩兵第十聯隊戦闘詳報」第13～14号、JACAR：Ref.C11111172000. No.1814- Ref.C11111172100. No.1815.
52. 「徐州附近会戦指導ノ方策」『北支那作戰史要』北支方面軍参謀部第一課JACAR：Ref.C11110927600. No.1291..
53. 韓信夫「台兒庄戦役及其在抗戦中の歴史地位」《近代史研究》中国社会科学院近代史研究所、1994年3月、67頁。
54. 「下山大佐・第二軍南進作戰ニ関スル件」「第二軍ノ作戰ニ関スル諸事情」「北支那作戰史要」（第4章・第3節）JACAR：Ref.C11110928700. No.1666-1667.
55. 前掲「第二軍ノ作戰ニ関スル諸事情」「北支那作戰史要」（第4章・第3節）JACAR：Ref.C11110928700. No.1671.
56. 「第十三師団命令」歩兵第一百六聯隊「張八嶺管店附近警備戦闘詳報」JACAR：Ref.C11112200800. No.419.
57. 「北地区警備隊命令」歩兵第一百六聯隊「張八嶺管店附近警備戦闘詳報」JACAR：Ref.C11112200800. No.465.
58. 前掲『戦史叢書 支那事変陸軍作戰(2)昭和十四年一月まで』、18頁。
59. 「北支方面作戰記録 第1卷 2(2)」JACAR：Ref.C11111708200.No.818.